

2012 年 2 月 28 日 高円寺「素人の乱」とウォール街を結ぶ：記録

松本 哉・樋口 拓朗・木下 ちがや・池上 善彦

木下：まず簡単に、この会にいたるまでの経緯を確認しましょう。ちょうど昨年、つまり 2011 年の 9 月ごろに「オキュパイ・ウォールストリート」（ウォール街占拠運動）を皮切りにして、さまざまな占拠＝オキュパイ運動がアメリカでおこりました。その少し前から、池上善彦さんとわたしは、ニューヨーク在住の高祖岩三郎さんのアレンジで、ニューヨークにおいて、原発問題のシンポジウムをする予定だったんです。すると、ちょうどそのタイミングでオキュパイ運動が起きた。そこに、今日話をしてくれる「素人の乱」の松本哉さんと樋口拓朗さん、それに小田原琳さんたちが何人かでやってくるようになりました。松本さんたちは、ニューヨークにいるあいだは、ウォール街占拠の現場である公園で、つまりズコッティ・パークにあるテントで居住していました。わたしたちは、そこに合流する形になり、それでオキュパイ運動の何たるかという経験を共有したという次第です。ただし、それにはさらに文脈があって、そこにいたる経緯の筋道は、二つくらい指摘しておかなくてはなりません。まず一つは、わたし自身も入っていたのですが、松本さんや樋口さんが中心となった「原発やめろデモ」実行委員会のことです。この実行委員会は、3 月 11 日以降に、ずっとデモを企画してきました。もうひとつの文脈は池上さんの活躍です。池上善彦さんも、独自に、それも大変活発に、この原発反対の言論を海外に向けて発信してきました。それがニューヨークを中心にして、高祖さんの拡散もあって、影響を与え始めていました。つまり、わたしたちの受け止め方としては、オキュパイ運動とはただ単に外国ですごい運動があった、多くの人が参加した、といったようなことではなくて、わたしたち自身がある程度の共通の感覚や経験を持ちながら目撃し、関わっていきなり、関わっていった出来事だったように思います。そういう形で世界の他の国での運動に繋がり、自分たち

が闘って、体験的に何かを共有しているということは、非常に稀有な経験だったと思います。と、まあ堅苦しい言い方をしましたが、こういう感じで話をしていきたいと思います。(笑) 今日はもちろんオキュパイ運動の話はしますが、われわれだけでなくみなさんの多くもデモに参加されてきたと思いますから、積極的に話していただきたい。「素人の乱」の「原発やめろデモ」、とくに今われわれの間で焦点になっているのは脱原発の「杉並デモ」ですね。これについても考えたい。アメリカの話、世界の話をしながらか、われわれが 3 月 11 日以降たどってきた軌跡というものを混ぜ合わせながら、今日は話をしたいと思います。まずはニューヨークの「ウォール街占拠」について論じましょう。どなたか口火を切ってください。

松本：どういう風にやりましょう。

木下：とりあえずニューヨークの話。

松本：はい。「素人の乱」の松本といます。よろしくお願いします。実は昨日まで台湾に行っていました。台湾にも反乱をおこす「大馬鹿な」連中がたくさんいて、いろいろ騒ぎが起きているのです。そこへ行って来たのですが、あまりにも彼らがすごくて驚きました。本当に、時間は守らないし、寒いからやめるとか平気でやるし。あの辺の「レベルの高さ」を経験すると、ニューヨークのことなんか色あせるようなところもあるのですが(笑)、せっかいですから、思い出しながら話します。とりあえず、ニューヨークに行ったとは言っても、自分は全然ニューヨークのことは興味もなかったし、詳しくないし、わからなかったんです。でも、いきなり「オキュパイ・ウォールストリート」という謎の反乱がおこり始めたので、この目で見たいと思って飛んで行きました。ズコッティ・パークという名の公園がウォールストリートのすぐ近くにあって、その公園に「有象無象」とでもいうしかないようなひとたちが、

ものすごく集まっている。ここは、9.11 で崩壊したあのツインタワーを1ブロック南に行ったすぐのところにあるんです。そこに人が大量にいるわけです。たぶん、今日のこの場に來ているひとは、だいたい様子は知っていると思いますから、あまり細かく言うまでもないと思うんですけど、そんな感じでいっぱい人がいて、ドラムサークルがあったり、いろいろなTシャツをステンシルで作っている人がいたり、しゃべってる人がいたり、謎の主張をしている人がいたり。とにかくいろんな人たちがいます。このズコッティ・パークという公園の中には常時400人から500人くらいの人がいて、昼になるともっと集まってくる。それが夜になると少し減って、という感じでした。一番すごいことは、彼らが完全に「有象無象」なんですよね。脈絡がないというか。中心になっている人たちはちゃんと真面目な人たちがいたりしてやっているんですが、そこに集まってくる人たちはとんでもない人たちでした。本当に金がないから來ている人もいるし、ただ遊んでいる奴らもいるし、居場所がないから來ている人もいる。あるいはちゃんと主張している人たちもいるけど、言っていることを真面目に聞いてみると、ちゃんとどこか、それもめちゃくちゃなんです。普通に貧困とか格差の問題を主張している人もいれば、社会主義者、共産主義者みたいな人もいる。アナーキストみたいな人もいる。黒人解放運動みたいな人もいれば、ホームレスの問題をやっている人もいる。先住民の人もいました。「中国共産党はよくない」なんて横断幕を出している謎の中国人が、一言も英語を話せないのにアピールしているんです。たぶん法輪功の人なのかな。そうかと思えば、そのすぐそばに、中国の国旗、五星紅旗を振っているアメリカ人の社会主義者みたいな人がいたりして、この二人が会ったら殴り合いになるんじゃないかとヒヤヒヤして見てました。日本から來た人間としては、こういうのはあまり慣れていないから、これは大変だ、と思って見ていたら、別に大変でも何でもなくて、意外と共存していたり、まったく別の立場でいろんなことを言っていたりしていました。一応はみな格差の問題、つまり1%の金持ちが世界を牛耳っていて、ほとんどの人は実は多少の差はあっても貧乏人じゃないか、

99%はひどい目にあっている、こんな世の中冗談じゃない、というようなところで一致しているから、一見まったく違うように見えるけれど、共通の敵が近くのウォールストリートにいるぞ、といった感じでその場が成り立っているんです。それがすごく新鮮だと思いましたね。日本だとだいたい細かい面倒くさいことで対立して喧嘩になったりしますが、そういうことを乗り越えて一つのことをやって、その後は別々にやっている。これはすごいという感想を持ちましたね。ただし、この連中もそれなりに面倒くさいんですよ。General Assembly という会議をやり始めて、あれはいいだの悪いだのと言って、すごく民主的にやっているんですよ。会議は完全にオープンな場所で行っているし、誰でも発言できるようになっている。これはすごく正しいんだけど、他面では、まあそれは面倒くさいです。さらにいいのは、この会議は強制参加ではなくて、それに興味がない人は不参加で、全然そこに行かないで遊んでいたり、食事のために並んでいたりとか、それもあり。開かれた場所で会議があつていろいろなことを決めていたりしても、別の場所では勝手に動いていたりして、一応そういうのをひっくるめて全体が成り立っている感じがあって、そのへんはすごくよかったという感じがします。そんな感じでズコッティ・パークはあったんですが、狭い公園にずっといるからみんな退屈で、一日中デモとか集会とかやっても、疲れてしまうから、そうするとやることもない。だから図書館があったり、ご飯食べるところがあったりもするんです。掃除もするんですよ。それから、物や洋服を売っているところがあったり、物々交換の場所があったり、リーガル、つまり社会的な問題を法律の立場から支援するチームもある。インターネット担当のブースもあったり、スペイン語を使って表現している場所もあったり。とにかくいろいろやっていました。黒板があるんです。そこに、今日は何時からどこで何をやりますみたいなことが書いてあって、そこに行きたい人は行く。一応会議とかもグループ分けみたいになっていてドラムサークルの会議は何時からどこでやりますとかそういうことが書いてあって、好きなところに行ってそこに参加して、という感じでした。われわれはテントに泊

まったんですが、ひどく寒かったですね。ズコッティ・パークに泊まり始めた最初のころに雨が降ったんです。パークにいたひとたちに驚かされたのは、寒くないんですかね、すごく寒い日だったのに半袖とかでウロウロしているんですよ。こっちはテント張ってようやく寒い寒いつて寝ているのに、向こうはテントの外でずぶ濡れになりながら熟睡していたりとか、すごいなあという感じでしたね。とりあえず大体そんな感じでした。(笑)

木下：樋口君にとってはどうでしたか。

樋口：樋口拓朗です。9月17日にウォールストリートで始まった「オキュパイ・ウォールストリート」に松本さんと10日間くらい行ってきました。松本さんが言っていたようにズコッティ・パークというところに300人から400人くらいの人々がテントを張って2ヵ月くらい住んでいたんですけれども、そこにわれわれもテントを張って10日間くらい住んでいたんです。大体今日ここに来ている人は「オキュパイ・ウォールストリート」でどんなことがあったということは了解されていると思いますから、われわれがどんなことをしてきたかということに限って、少しだけ話をしたいと思います。「オキュパイ・ウォールストリート」を中心にオーガナイズしている人たちのうちの何人かに、ニューヨークにある New School for Social Research という有名な大学院大学の学生がいたんです。10日間くらいの滞在の最後の日に、それでは「素人の乱」と「オキュパイ・ウォールストリート」で対話をしようというイベントがあったんですね。そこでセミナーをやったんです。Occupy Wall Street meets Japanese Anti Nukers と題して「オキュパイ・ウォールストリート」の人たちと日本の「素人の乱」という反原発運動をやっている人たちと話をするという企画です。その様子は、いくつウェブサイトに載っています。そこでどういう話があったのかということをお知らせしたいんです。松本さん、どうでしょうか。

松本：あのときは、最初は格差の話とか、このウォールストリートの人たちが主張していることとかを話していたんですが、それはみんな、「そうだそうだ」となるわけです。でも自分が一番覚えているのは、やり方の問題で、「有象無象」が完全に集まっている

じゃないですか。法輪功から社会主義者までいて大変なことになっている状況の中で、どうやってつじつまを合わせているのか。喧嘩なんかが起きるんじゃないか、というようなことを思っていると、向こうの人たちは General Assembly というようなことをやって、いろいろ本当に平場でみんな話し合えるような場所を作っているんだ、ということ言っていました。「それで日本はどうするんだ」という質問があったんです。こっちは「日本はまあ、酒ですかね」といった感じで答えました。日本でももめることはよくありますが、とりあえずみんなで飲んだりして、「まあまあこの人はこんなことが言いたいんだろう、とかいう感じで成り立っていますよね」みたいなことを言ったら、向こうは完全にそれがギャグだと思っていて、「まさかそんなわけないでしょう」とって大爆笑なんですよ。向こうの人たちは、日本はまだちゃんとした民主的な世の中になってから戦後60年とか50年とかそんなものだろうと。わたしたちアメリカは、200年〜300年かけてだんだん民主的になろうとやってきている。「そのうち日本もよくなるから一緒に頑張ろう」みたいなことを言うんです。すごく前向きに言っていてくれるとは思いますが、こっちは頭にくるじゃないですか。違うだろ、それって。そうじゃなくて、もっと昔から日本にも民主的なやり方とかがいっぱいあった。国の体制がちょっとおかしかった戦争動員の時期もあったから、大分変な風に受けとめられているかもしれないけど、実は土着的なところでは意外と自分たちで自分たちの集落やコミュニティーのことを民主的に決めていたことはいっぱいあったりしていた。そういう自生的な力というものを、セミナーの場にいたアメリカのひとたちは甘く見ているんですよ。このギャップに直面して「ああそうなんだ」と感じる感覚で、ちょっと何かがわかりましたね。それがすごく印象深かったです。

樋口：ぼくが覚えている話では、このセミナーで「オキュパイ・ウォールストリート」をオーガナイズしているような人たちが「自分たちはこういうことをしているんだ」ということのなかでもっとも自信を持って言っていたことは、直接民主主義を実践しているんだということだった点ですね。さっき松本さ

12 高円寺「素人の乱」とウォール街を結ぶ

んも言っていましたけども General Assembly、つまり「総会」と呼ばれる集まりが、ズコッティ・パークという占拠された公園で毎日夜の7時から行われていたんですね。毎日夜の7時にそこに集まってきた人、ワーキンググループはさっき松本さんもたくさん例を挙げていましたけれど、シルクスクリーンやっている人とか、食べ物出している人とか、リーガルのことをやっている人とか、それぞれのワーキンググループの人達が General Assembly でこれから「オキュパイ・ウォールストリート」をどうしていくのかということをもものすごく直接民主主義的手法で決めていく。そのことをとても自信を持って話していました。また、そこで使われたのが「ヒューマン・マイク」というやり方、つまり人間拡声器なんですね。すでにかなり有名になっているやり方だから、みなさんももうひょっとしてご存じじゃないかと思うんですけども、最初は「オキュパイ・ウォールストリート」でも拡声器を使っていたんです。でも警察から、大きな声を出してはいけないと言われて、どうやって拡声器なしでみんなの意見をちゃんとすいあげられるような会議ができるのか考えたんです。そういう時に「ヒューマン・マイク」が使われたんです。ひとりが声を出して、それが聞こえた人がそれを繰り返して、それを聞いた人がまたさらに繰り返すという形で、一人の声は小さいかもしれないけど、それを全員に伝えるという試みですね。そういう中で、自分たちは直接民主主義を実践しようとしているんだ、つまり代議制の民主主義で代表者を決めて、代表者の人たちに自分たちの意見を反映してもらって物事を決めてもらうのではなく、全員が直接参加する。何か革命が起こって、その革命後に訪れるような世界というものを「オキュパイ・ウォールストリート」は今、ここで実践しようとしている、という確信を持っていましたね。そのときに、日本の人がどう反応したかということ、松本さんは「自分たちはもうすでにそれをやっているんだ」ということを言っていたんです。たとえば、松本さんは 2007 年に杉並区議会議員の選挙に出たりしたんですけど、それは別に区議会議員になってその区の政治を変えようということのためにやったわけではない。選挙に立候補することで、駅前で演説する

という名目のもとに路上パーティーがひらけるとか、そういう目的のために出たんです。その時に松本さんたちが言っていたのは、自分たちは革命後の世界を先に作ってそこで生きるぞということです。「オキュパイ・ウォールストリート」の人たちが革命後の世界にやってくるような直接民主主義的なやり方に近いものをここでやっているんだ、と言っているのは、つまり革命後の世界を生きるということでしょう。だったらそんなことは、「素人の乱」の人たちがもうやっているよ、という話をしていたんですね。アメリカの人たちが「自分たちの民主主義はとても進んでいるけれど日本はまだまだかもしれませんね」と言った時に、松本さんの「いやそうじゃないんだ」という反応があって、その真意はこれだと横で聞いていて思ったりもしました。

木下：では、池上さんにもすこし話をしてもらいましょう。

池上：池上善彦と申します。ひとつ松本くんたちに聞きたいんですが、ズコッティ・パークに 10 日間くらいいて、その間トイレはどうしていたんですか。

樋口：じゃあトイレの話をさせてもらいます。(笑)ズコッティ・パークの中では住むところはテントでどうにかしているわけです。食べるものは、大きなキッチンが用意されていて、そこで食べたりするんですけど、警察からは「公共の公園だから火を使ってはいけない」と言われているんです。だから冷たい物しかない。暖かい物は外から買ってきて提供しているわけです。そこで、長い人は 2 ヶ月くらい滞在しているわけですから、食べた物、飲んだ物は、排泄しなければいけない。どうするかというと、公園にはトイレはないんですよ。だから近くにあるバーガーキングというハンバーガーショップでコーヒーだけ買ってトイレを使わせてもらったり、コーヒーをかうふりをしてトイレに入ったりということをもみなしていましたね。でも、バーガーキングだけでなくマクドナルドもあって、またもう少し行ったところにサブウェイがあって。バーガーキングはトイレの前に大行列ができていますんですけど、サブウェイは少し離れたところにあるのであまり人が使っていないくて、トイレの列をなす人も少なかったりしました。われわれが到着したのはズコッティ・パー

クの占拠が始まってから1カ月くらいたってからだったんですけど、インフォメーションデスクみたいなところに“The List of Public Toilets”という、こういうところでトイレを使えますよというリストがあって、ここのトイレが一番列が短いみたいなことも書いてあるから、それでどこに行けばいいかわかったんです。

池上：そういうことは意外に知らないし、いざとなると緊急の重要性があることなんだよね。

樋口：それが、ニューヨークに行けば日本よりもっと自由な運動がやり放題かと思うと、またかならずしもそういうわけではないんです。そのことと関係していますが、ご存じの方も多いとは思いますが、ニューヨークの地下鉄にはトイレがないわけなんです。われわれだったら、日比谷公園で「派遣村」をやるなら、日比谷公園のトイレを借りればいいのか、地下鉄に入れば使えるとか考えますよね。でも、ニューヨークではそうはいかないわけです。80年代のレーガン政権時代以降、新自由主義政策のためにホームレスがたくさん生み出されて、それでホームレスに占拠されてしまうという理由から、トイレを全部なくしてしまった。もう一つはズコッティ・パークという場所なんですけど、あれはパブリックな公園ではなくて、プライベートな公園なんですよ。ニューヨークでは、高い建築物がある場合には、その建築物に付随する形でかならず公園を造らなければいけないという決まりがあるんです。だから一応所有者がいる。所有者が認めている限りはその場所を使える。これがもし完全に州政府とかニューヨーク市の持っている公園だったとしたら、占拠みたいなことをすればおそらくただちに排除されていただろうと思います。あそこは、なんとか所有者に運動の正当性を主張して確保した場所だったんですね。かならずしもニューヨークだから運動ができたというわけではなくて、それなりに厳しい制限がある中でやっていた。その面で言うと、たとえば日本の「年越し派遣村」みたいなものの方がずっとやりやすいということもあるんですね。そういう違いもあります。

池上：後でこの「オキュパイ・ウォールストリート」をやっている人に聞いた話なんですけれど、最初に

ズコッティ・パークを占拠した時は1日持てばいいなという感じだったらいいですね。でも、1日たっても誰も排除に来ない。3日たっても来ない。1週間たってもまだ大丈夫。報道されたのは何日もたってからですけど、やっている当人たちは成功するかどうか全然わからなかったわけですね。今一応成功した運動みたいになってはいますけども、やっている当人たちにしてみれば明日をも知れぬ、いつ警官が排除にくるか、そういう緊張のもとにずっとやっていたというのは、すごく面白いと思いました。もう一つは、そもそもぼくは、日本の原発事故の話をアメリカ人に伝えるという意味でアメリカに行ったんです。何力所かで日本の原発事故の話をしたんですけども、多い時はアメリカ人が50人くらい来てくれて。その時にいろいろ質問を受けるんです。かならず聞かれるのはニューヨークの運動、ニューヨークの反原発運動をどう思いますかということです。それでニューヨーク市民はこの運動についてどう思っているのかということがよくわかるんです。松本くんたちがズコッティ・パークの中でテントを張って、「反核」と日本語で大きく書いた看板を出して主張をしていたようですが、それには取材とか反応とかはあったんですか。

樋口：ありました。さっきも言ったように10日間くらいテントで生活をしていたんですね。最初2日くらいは雨が降っていたりして、それをやり過ごすので大変で疲れ切っていたんです。でも、3日目くらいにこの立て看板を作って置き始めたんです。これから一気に周りの人の反応は変わりましたね。それまではなんかアジア人がいるな、っていうだけでしかなかったんですけど、この「反核」という漢字と、その下に英語で「自分たちは日本で福島事故の後に反原発運動をしているんだ」みたいなことを示したりしていると、昼間は毎日公園に観光客などを含めて1000人くらい人が集まるんですけど、そういう人たちも看板を立てたとたんみんな写真撮って行きます。地元のメディアとか自分でブログをやっている人とか個人ジャーナリストとかが写真を撮っていったり、ぼくらがインタビューを受けたり。日本の記者も来ました。読売テレビとNHKから取材を受けましたね。

14 高円寺「素人の乱」とウォール街を結ぶ

池上：それにしても、ズコッティ・パークに来る観光客はすごかったですね。

松本：ええ、すごかったですね。占拠している人たちもいるんだけど、昼間は同じくらいの人数がいるんじゃないかっていうくらい観光客が来ていたりして。それ以外には、学生や研究者で、調査をしに来ている人もいました。とにかく、運動を見に来ている人たちが大勢いたってことです。それは別に悪いことではないよね。観光客は団体でも来る。観光バスまで来ていました。目の前を通りかかったバスのなかから「オキュパイ・ウォールストリート」なんて叫んでる人がいたりしてね。誰なんだこいつは、みたいな人とか。あとは、中国人の団体観光客が旗を持って来て、一応中国の旗じゃまずいから星条旗を持ってきていて、その辺のインチキくささもすごくいいなと思いましたね。あともう一つ偉いのは、向こうの大学生とかもいっぱい来ているんですけど、本当にすごいのは小中学生が来るってことです。クラスで15人とか20人とかが先生に連れられて来て、先生がここが「オキュパイ・ウォールストリート」で云々っていう説明して、お前ら行って来いという感じで子供が公園の中に放たれて、それで謎の反乱を起こした大人たちに話を聞いてメモを取ってるんですよ。それで15分くらいいたら、また戻ってきて、その先生に連れられて帰って行く。そういう光景を何回も見て、これはやっぱり凄いいんじゃないかって思いましたね。日本ではそんなこと絶対にやらないじゃないですか。そういう風に現場をちゃんと見て、話を直接本人から聞いて、こういう感じでやっているのかということちゃんと肌で感じるということは、すごく教育としていいことです。別にこの「オキュパイ・ウォールストリート」で主張されている意見に従えと言っているわけではないんです。本当に社会科見学で見に来る。子供のころからこういうことをちゃんとやっているから「オキュパイ・ウォールストリート」やデモをやった時の周りの反応や、何かあったらすぐにデモに参加するといった感覚ができていのかなどは思いましたね。意外とあのズコッティ・パークを見に来ている人たちが重要なのではないかと、思いました。

池上：われわれが行ったのは10月の半ばくらいで

すから、占拠が始まってひと月くらいたったところだったんですね。その時は、ちょうど今全米の約2000か所でおこっているオキュパイ運動がどんどん広がっている過程だったんです。ぼくと木下さんはニューヨークのブルックリンのホテルに泊まっていたんですけども、それはちょうど「オキュパイ・ブルックリン」というのが立ちあがった時だったんです。その話を少しだけします。「オキュパイ・ブルックリン」が立ちあがったところは黒人居住区だったんです。行ってみると、ちょうど最初の General Assembly があるというのです。それでそれに参加しました。場所はものすごく小さな貧しい教会なんです。そこに行くといっぱい人がいて話をしている。その外で黒人のおばさんがピザを配っているんです。話を聞いてみたら、そのおばさんは近所の人で、若い黒人が歩いていると「ちょっと寄って行きなさいよ」と声をかけるんです。要するに近所のおばさんが近所の若い連中を呼び込んでいる。そういう黒人のコミュニティーなんですね。言っていることもニューヨークとは少し違って、黒人居住区で黒人がすごく多いので“Anti Racism”という言葉がよく聞けるんです。さっきの「ヒューマン・マイク」のように誰かが“Anti Racism!”と言うと、周りのみんなが“Anti Racism!”と答える。それが永遠に続くんです。7時くらいからやっていて9時になっても続いている。われわれは寒いので帰りましたが、ずっとやっているんですね。教会も貧しいんですけども、その黒人のおばさんが言うには「ニューヨークには教会はとても多い。ただ立派な教会は墮落した教会である。貧しい教会が本当の教会である」と、すごく感動的なことを言うわけです。この教会はずっとホームレスの支援をしてきた。ここが本当の教会だ。第一回の総会で、立ち上がりの場に居合わせたというのは感動的な瞬間でした。今は「オキュパイ・ブルックリン」は具体的に空き家占拠を行っています。2008年の金融危機で家のローンが払えない人が大勢出て空き家がいっぱいあるわけなんです。そこを占拠するという運動を今やっています。オキュパイ運動と名乗って、今全米で約2000か所でいろいろなものが生まれていますが、本当にオキュパイに成功したのはズコッティ・パークだけだと思うん

です。何度も何度もオキュパイを繰り返しては失敗し、繰り返しては失敗し、そういう過程にあるという感じですね。

木下：さっきのブルックリンのように、いろいろなところでオキュパイ運動は出てくるんです。そもそもズコッティ・パークのオキュペイションが一番初めにできた経緯というのを見てみると、わりと偶然的です。こういう形で今樋口さんや松本さんが話したようなものがどこでもできるかという、ちょっと微妙なんです。みなさんご存じのように一番初めにカナダの『アドバスター』という雑誌が、アメリカの極右である「ティーパーティー運動」に対抗するために、こういうことをやろうという呼びかけを行いました。『アドバスター』誌そのものは、その後の展開とは大して関係がないんですね。一番初め9月の頭あたりで会議をやった時というのはまったく様子が違っていただそうです。これは後でアメリカの友人たちに聞いたことなんですけど、最初の会議はごく普通の会議なんです。つまり党派の組織の人間が前で永遠に演説をしていて、それを聞いている人はただ聞いているだけ。それで何かやりましょう、という会議だったんですが、その時にデビッド・グレイバーたち10人くらいの方が会場の端っこに車座を作ってそこでトークをし始めた。すると、みんな最初の演説はそっちのけで、グレイバーたちの方に寄って行って、最終的には演壇にいた人間も寄ってきてしまった。(笑) そういう形で General Assembly のような形でやろうじゃないか、という流れができたわけです。だからズコッティ・パークも一皮めくると結構いろいろな軋轢はあるんです。いろいろな党派の人間とアナーキストたちとか、それには関係ない人たちとか、そうした人々のあいだでは、オキュペイションのやり方をめぐってもいろいろな軋轢があるようです。どの運動もそうだと思うんですけど、そういう苦闘を抱えながらやっていたという面も見えておかないといけませんね。

樋口：この「オキュパイ・ウォールストリート」は9月17日に始まって、その2ヵ月後くらいの11月15日にズコッティ・パークから排除されるんです。その後11月17日に大きな反排除デモがニューヨークで起こったんですけど、その後はもう膠着状態に

なっていて、オークランドとかシカゴとか、各地でそれぞれのオキュパイは起こるけども、メディアの大きなアテンションをつかむほどの動きにはなってなかったんです。それで最近になって、一ヵ月くらい前でしょうか、今になって「オキュパイ・ウォールストリート」がなんだったのかということを振り返ろうという話があって、さっきも出たデビッド・グレイバーやレベッカ・ソルニット達も参加して大きなシンポジウムが開かれたんです。その席で実際「オキュパイ・ウォールストリート」みたいな運動をやって、自分たちは何を得られたんだという提題があったんですね。それにも関連することなんですけど、われわれが行った時には Assembly はニューヨークだけでも4つくらいあったんです。ズコッティ・パークに大きな General Assembly があります。でも、さっき木下さんが指摘したように、これは一皮めくると中にはいっぱい軋轢がある。直接民主主義というとみんなが言いたいことを言って、それぞれの意見が尊重されている、といった調和のとれたものを想像するかもしれないんですけど、そうとは限らない。このズコッティ・パークの General Assembly なんてダメだと言って抜けて行った人たちが、たとえばブルックリンの Assembly を作ったりする。それ以外にもソーホーのあたりでは、アート系の人たちが Assembly を作ったり、ユニオンスクエアというところでは学生たちが中心になって学費の問題を扱うような Assembly を作る。だから中にもいっぱい分裂はあったりするんですよ。やっぱりどこにも批判はあるんです。General Assembly に対しても、「オキュパイ・ウォールストリート」に対しても、いろいろ批判はあったりするんだけど、それでも何を自分たちが手に入れたのかということを振り返るのは意義深いと思います。その1ヵ月くらい前のシンポジウムで言われたことのうちで、ぼくが特に好きだったのは「今自分たちは、9月の頭の頃よりも力強さを感じている」という発言です。力強さであったり変化の予感を感じていたりする。何かしらのオブティミズムというものを、いま自分たちは持っているんだ。Sense of Power、力の感覚の程度が完全に増しているんだ。「オキュパイ・ウォールストリート」は何を主張しているのかわからない、何を目

的にしているのかわからない、要求項目が見えない、というようなことを言われてきましたが、この「力が増えている」という感覚を持っているという点だけでも、何かしらの意味があったのではないかな。実際オキュパイというのものも、さっき池上さんが言われましたけど、アメリカだけで2000か所くらいあったりする。スペインでもギリシアでも増えている。それだけの動きがあったということについて、何かしらの力を感じられるものだったのではないかな。日本の反原発運動のことについても、同じようなことが言えるのではないのでしょうか。ぼくたちも大体1年くらいかけて、過去に5回大きな反原発デモをやって、いろいろな批判も受けたりしたんです。でも、こんなことができたんだという何かしらの力強さ、変化の兆し、ある種のオプティミズムみたいなものが、自分たちのなかでもちょっとは大きくなっているということは感じましたね。

木下：なるほど。そのあたりのことは、松本さん、どうですか。日本の「原発やめろデモ」のような運動と絡めながら話していきたいんです。今樋口君が言ったみたいに、要するに批判はするけど否定はしない、そういう意味では基本的にオプティミズムというか、前向きにやっついこうというような感じというのは似ているといえれば似ている。ニューヨークの新しい運動と日本のやはり非常に新しい運動の、たがいに似ている部分というか、共通している部分というのは、感じられますよね。

松本：ええ、やっぱり似ています。日本でも反原発の運動が起こってからは、大分今までとは様子が変わってきた。今までだったら細かいところまで一致して一つの課題にあたっていたと思うんですけど、原発というのは本当に放射能が来たとか、危ないじゃないかとか、そういう本当に根源的なところからみんなの不安感や怒りを引き起こしました。原発はなくした方がいい、という根本的なところから来ているから、そこまで細かい議論を必要としなくてもデモが起こる、立ち上がれる。そういう課題なんです。それでみんなが怒ったわけなんです。だから、そういう意味でも今までとはまったく違う感じですよ。本当にいろいろな人たちが来て、細かい背景とかはまったく違うけれど、とりあえず原発はいらないと

いうところで一致してやっているというところがあります。人の集まり方を見ても、今までとは全然様子が違ってきます。「素人の乱」がデモを始めた時も、原発は危ない、恐ろしいから反対しましょう、といったら大勢の人が来た。組織も何もなく、よくわからな感じの集まり方になった。もちろん細かいところはニューヨークとは違うにしても、そういう意味では似たところがあったような気がします。池上：参加した方も多いとは思いますが、「素人の乱」が呼びかけた最初の2011年4月10日の最初のデモのころのことを思い返してみよう。3月11日に津波があって12日に原発が爆発した。それから約一カ月間は、みんな何があったかよくわからない。不安で重苦しく、何を言っているかわからない、何を考えていいかわからない、そういう状況だったと思うんです。じゃあどうしたらいいんだろう、っていう時に、4月10日に「素人の乱」のデモが高円寺であって、それから一気にみんなしゃべりだした。何か行動しました。だから、ぼくもデモは初めてではないですが、デモンストレーションというのはこんなに勇気を与えるんだ、こんなに力があるんだ、ということであらためて実感したような気がするんです。これはデモに参加した人もそうだけど、参加しなかった人もそうだと思うんですよ。何かが始まっている、何かをしていいんだ、何かをしゃべっていいんだ、と感じられた。それだけすごいデモだったと思うんです。高円寺の松本さんたちの「素人の乱」がどういう歴史というか経緯をもって存在しているのかはみなさんご存じだと思います。都市の中でやってきた、都市的な運動が、原発事故に一番最初に一番素早く反応して、それに多くの人が共感したんです。このことはこれから考えてみるべきことではないかと思うんです。なんでここで一番素早く反応できたのか。さらにもう一つ考えておきたいのは、やはりデモというものがこれだけ人に力を与えるんだ、ということです。参加した人にもしなかった人にもですよ。デモは、一時期毎月やっているな、という感じで、もう少し経つと毎週やっているな、という感じで、今は毎日やっているな、という感じですよ。よく見れば毎日やっていると思うんです。一番少ないので50人、多いので5万人、その間

でやるという感じになっていて、日本も変わったなあという感じはしますね。

木下：その4月10日のデモですけど、去年の年頭からアラブ地域で大変動があり、革命が起きました。ぼくはそのことで2月にイルコモンズさんと企画をやったんですけど、やっぱりあのインスピレーションは大きかったと思うんですけど、いかがですか。

松本：うん。アラブでの動きはちょうど1月、2月くらいですよ。チュニジアあたりから始まって、エジプトでもいろいろ起こってきて、実際に政権が倒れちゃったりするのを見てきた。しかも中東なんて、今までそんなことありえないと思ってきたじゃないですか。そんなところで起こり始めたというのにもものすごく衝撃を受けました。「オキュパイ・ウォールストリート」もそうですけど、エジプトの人の集まり方も今までとは全然違っていました。結局、誰が中心かよくわからないという感じになっているんですね。謎のリーダーが現れては消えたりしていました。それが成功したというのに、ぼくらは衝撃を受けてました。「素人の乱」は、実は世の中を率先して変えてやろうとは全然考えていない。そんな面倒くさい権力者の連中は放っておいて、勝手に謎の人が集まっている空間を作っていて、既成事実として革命後の世界を作ってしまった方が手取り早い。そういう趣旨でやっているんです。だからあのとき、エジプトのタハリール広場がその完成形みたいに見えたんですよ。テレビで見た時に、これはすごいと思いました。そこで、祝勝会をやろうということになって、高円寺で騒ごうということになったんです。木下さんが言った企画というのはそれです。高円寺に「なんとかバー」というバーがあるんですけど、そこでイベントをやって、イルコモンズ小田マサノリさんと一緒に、エジプトの映像を流したりしたんです。われわれは何もやっていないんですけどね。(笑) 50人から60人くらいが狭いところに集まって来て、めちゃくちゃ盛り上がったんです。そこでこんな感じで世の中は変わるんですね、と言う話をしていました。ただその時の感想としては、日本では無理だろうということだったんです。無理、とまでは言わなくても、絶対こんな現象は日本には

起こらないだろうなという話になっていたんです。人の集まり方にしてもそうでした。だからいっそのことエジプトに移住しようか、なんて話があったりもしました。日本だといろいろなことがインターネットで広がったとしても、実際街頭には出て来ないでしょ、という感想があったんです。でもこの「原発やめろデモ」やってみたら、まったく同じような現象が日本でも起きた。こんなことが起こるのかというのはすごくびっくりしました。

木下：4月にデモをやるまでは誰も予想しなかったですよ。

松本：4月のデモが本当にすごいのは、この日1万5千人くらいの人がデモに参加したんですけど、そのうちの95%のひとがデモ初参加なんです。それが一番すごい。ちょうどこの日は芝公園でも、「浜岡原発とめよう」という反原発デモがあって、それには昔から反原発運動をやっていた人だとか、市民運動をやっていた人だとかが参加していて。当時はそっちの方がずっと大きいんじゃないかと予想しておそらくデモとかに日ごろから積極的に参加してきたような人は、みんなそっちに行っただけなんです。そこでこっちはいつもの「素人の乱」でわけがわからないのかと思いきや、結局はインターネットで情報を得た人は実はみんなこっちに来たみたいです。警察も500人くらいしかデモに来ないだろうとふんでいたらしいんですけど、1万5千人来たということで大混乱でした。

木下：あの日は、デモを守るスタッフだっていないに等しかったですよ。誰も道順覚えてなかった。(笑)

松本：しかも、1万5千人でデモをしましたけれど、計画はやっと10日前に決まっただけでした。10日前に飲み屋で「やろう」となって、そこから宣伝して。

木下：ぼくも駅の改札出て、その場で「はい」って腕章渡されて、それでスタッフやってくれと言われてただけ。こういう流れになっていったわけですよ。この後に時間を進めると、つぎの新宿アルタ前広場集会という出来事があるわけです。あのアルタ前広場集会は誰がやろうと言い出したのかは忘れちゃけども、やっぱり、タハリール広場の影響というか、

そういうイメージがあったわけですね。

松本：そうです。この時ももちろん大成功ですよ。さっき池上さんが言ってくれたように、デモってこんなにインパクトがあるのかというのは、やった側の感想でもあったと思うんです。それですごく広がっていったんです。5月、6月、8月と連続してデモをやった。警察の方は、それがあまり盛り上がりがないようにするために、いろいろ言ってくるんです。デモ規制しなくてはならない公安というのは、本当に仕事柄、哀れな人たちなんです。デモを規制するのが生きがいみたいになっていて。なるべくデモを分断するようにしたんですよね。4月10日の最初のデモのとき、実際どんどん人は集まってきていて1万5千人くらいになったんですけど、すると、ひとつのデモとつぎのデモとの間を離して、一つ一つのデモ隊が500人とか1000人くらいで別々に歩くように強制する。だから、実際には全体的な盛り上がり方としては、1万5000人規模だということが感じられなかったんですよ。1万5000人いたと言っても、そんなにいたの、と思う人が多くて。報道でも2000人が集まりました、と言ってるところもあったんですけど、それは一つのデモ隊しか見ていないからです。そういう感じだったんです。これはしてやられたと思いました。これはやっぱり、エジプトを見てもわかるように広場を作って、こんなにたくさんの人が原発に反対しているんだという空間を作らないと世の中は変わらないんじゃないかと思ったわけです。参加している側としても、これだけたくさんの人がいたんだと思ってすごく勇気づけられたりする。最初にやった高円寺のデモでは力づけられるものがあつたので、そういうものを見えるように作らなければならぬと思って、それで新宿のアルタ前広場にぼくらの広場を作ろうという作戦が出てきたんです。それで、これが大成功しました。

池上：あれは制圧だよな。

松本：この日はデモはデモでやったんです。デモにもたくさんの方が来て、届け出上はデモはアルタ前広場で解散、ということだったんですね。でも、実はメインはそこからだったんですよ。いつもみたいにデモをやって、最後みんなで集結しようと。この6月11日というのは全国統一行動という感じで各地、

小さい町でもいっぱいデモをやっていたんです。日本全国で百数十か所で行っていました。だから東京や関東で昼や夕方デモが終わった後アルタ前にどんどん集まってきて、結局最終的に2万人近くが集まるという大変なことになったんです。これは大成功でしたね。本当はデモが終わった後に不法集会になったら何を言われるかわからないので、どうにかしてそう言われないようにしようと思っていました。そこでいろいろな政党に当たって街宣車を貸してもらったんです。政党の街宣車というのは宣伝許可証をとっているから、宣伝許可証さえあれば街頭演説だけはしていい。ということは街頭演説をしていて、周りでその街頭演説を聞いているということだったらいいいんだろということになって。社民党、共産党、新社会党から3台くらい借りたんです。それをアルタ前広場の周りに3台配置しました。演説をやっているのを大量の人が聞いている。それが事実上の集会になる、というやり方でやったんです。2、3時間では終わらないね。4時間くらいやりました。それでデモが到着するに従ってそこに人が増えていくという感じです。これはすごかったです。この時は、さすがに通行人とかもなんでこんなに人がいるんだ、みたいな感じでした。ああ脱原発か、だったらしょうがないか、という感じでしたね。あるいはTBSの報道特集も生中継したり、ヘリまで飛ばしたりして広場を空撮しているんですよ。こんなのは何十年ぶりなんだっていうくらいのことだったと思うんですけど。そういう広場が出現した、これがすごかったですね。

木下：池上さんはどう見えていますか。

池上：そう、まさに制圧ですよ。今松本さんが言われたように、この日都内で4か所、国立、小金井、三鷹、経産省包囲、それから全国で百何カ所デモがありました。4月5月6月と高円寺「素人の乱」が中心でデモがあつたんですけども、ここから全国に一気に拡散し、中心の無い同時多発デモが6月からはほぼ毎週行われるようになった。同時に「素人の乱」が中心のデモもやっていくんです。それでも分散して多種多様にやっていく。その転機が6月11日ですね。

木下：それから9月に原水禁の6万人集会がありま

したけども、そんなふうに分散して流れていくということに意義があったと思いますよ。

池上：さっき松本さんが言ってくれましたけども、このころまではエジプトのタハリール広場に学ぼうというスローガン、あそこにモデルがあるという感覚が強かったですね。まだオキュパイ運動はなかったですから。

木下：うん。誰かが言うわけでもなくみんなそう思っていましたね。あ、タハリールだって。

池上：常識になっていた。

木下：これでかなり警視庁を怒らせてしまった。9月11日に同じことをやろうとしたら、結果としては大勢逮捕されてしまった。そういう事件が降りかかりました。逆に言うと警察も本当にアルタ前広場の出来事が嫌だったんですね。こういう形で集まるのが日本で当たり前になってしまうのは、かれらは絶対阻止したい。

池上：この6月11日で警察は完全に面子をつぶされたわけです。だから9月に同じデモをやったとき、それに参加された方はご存じだと思いますけども、アルタ前広場は今度は全部フェンスで囲われて入れないようになっているんですね。しかも、デモでは逮捕者が十何人出た。何もしていないのにどんどん逮捕されてします。あれはだから、6月の時の仕返しをされたわけですね。

木下：要するにどういう風な仕返しだったかという、普通のやり方とは違うんですね。これまでの日本の場合だと、活動家を捕まえて法的な拘留期限ぎりぎりの23日間入れておいて嫌がらせをするということだったんですけど、この時の捕まえ方は、アルタ前に人が流れないように前もって捕まえてしまう。アルタ前に人が集まるのをなんとかして阻止したいという一点でした。だから、逆に言うと捕まった人は比較的早く出てこれたんです。現場を制圧すればよかったわけです。しかも捕まえた刑事の方が、なんで捕まえたかよくわからないと言っている。そういう意味では、デモと警察の関係もまったく変わったというのがわかりましたね。

樋口：4月10日の「素人の乱」が主催した1万5千人のデモは、本当に誰もコントロールできなかったんです。というのは、デモに参加する人も9割がデ

モ初めての人だからどうやって動けばいいかわからない。デモの主催者も、実は完全に人数が足りてないし、コースもよく覚えていない。(笑) 警察も500人くらいしか来ないと思っていたから、人数も少ないんです。だから誰がこのデモを動かしているのかわからない、というような、タハリールの自立性、自発性が高くなったと思うんです。ところが、そのデモを経験した後、警察の方も高円寺「素人の乱」を標的にしてきた。6月11日にさっき説明した新宿アルタ前広場の作戦をやって大成功したら、9月には完全に「素人の乱」がターゲットにされて弾圧が降ってきました。「素人の乱」が中心になってきてしまっていたんです。それで逮捕はされるし目の敵にはされるし。そうしたら、9月19日に明治公園で大江健三郎たちが呼びかけた6万人集会があったんです。あれはもう完全に組織的な大動員ですね。組織や政党が人を集めてやった。あのような組織力は「素人の乱」にはとうていないのに、デモをすると、大組織の方ではなく、こちらが警察から弾圧をうけてしまう。

木下：ただぼくは6万人集会で驚いたことがあります。約十年前の、アメリカによるイラク戦争開戦に反対したデモなんかだと、デモのなかで逮捕者を出すという文句を言われたわけですよ。お前らが跳ね上がったから捕まるんじゃないかと。ところが今回に関してはまったくそういうことはなかったですね。おじさん、おばさん、労働組合の人からも、6万人集会に参加した「素人の乱」のドラムデモが大喝采をあげましたね。結局逮捕者のためのカンパが400万円も集まった。かつてのような分断は生まれなかったんです。捕まった人間は跳ね上がった行為をした人間だから自分が悪いんだ、ああいうことをするから運動がおかしくなるんだ、というような流れは一切できなかった。これはすごく大きかったと思います。

池上：ふうん。逮捕されて義援金400万円というのは画期的ですね。ズコッティ・パークはね、1億円以上の義援金が集まっているそうです。まあこれからどう使うかをめぐってかなり内紛が起きているようですけれど、真偽のほどはわかりません。それはそれとして、今回の一連のデモで非常に目立つのが

ドラムなんです。日本のデモではサウンドカーは出ていますけどあまり歌はないんです。タハリール広場でも歌はなくてはないうけど、そんなに多くはない。ズコッティ・パークでもドラムがあちこちで目立つんです。日本の場合はドラムが独立してドラムだけのデモをやっている。だから歌ではなくリズムを、というのが2011年の世界的な大きな特徴だと思います。

樋口: 9月11日にもデモやって「原発やめろ広場」をアルタ前で6月のときと同じようにやろうと思ったんですけど、大量に逮捕もされてしまった。それでどうしたらいいんだろうな、って考えている時に、ニューヨークで「オキュパイ・ウォールストリート」が始まったんです。だから中東だけでもスペインだけでも日本だけでもなく、ニューヨークでもあるぞ、ということでぼくたちは実際にニューヨークへ行くことにしたんです。

松本: 最初は中東でインパクトがあって、これはすごいと思っていたらそれどころではない大震災が起った。その1カ月後には中東で見たような光景が高円寺から広がり始めた。その後、スペインでオキュパイがあって、ロンドンでは大暴動があって、世界中すごいことになっていると思っていたら、今度はニューヨーク。ニューヨークなんてアメリカの本拠地みたいなところで、最近しばらくそんなすごいことって起こってこなかったじゃないですか。そこでも起こったっていうのはすごく衝撃的でした。中東で起こって日本でも起こって、ニューヨークでも起こったら、もうこれは世界中じゃないかと。普段こういうことが起こりえないところで起こり始めているということですから、今年は世界中がすごいことになっている年なんだということを実感しました。しかもニューヨークの人たちが言っていたのが、1%がろくでもなくて、結局他の人がひどい目にあって、冗談じゃない、われわれは99%だということです。そういう格差の問題は、だいたい貧乏人同士のもめごとになるんですよ。もっと貧乏な人がいる、とかお前は豊かじゃないか、とか。そうやって貧乏人同士が、どっちが貧乏か、どっちが金持ちかで競い合って結局うやむやになるというパターンが多かったんです。しかし、そういうところもちゃんと克

服していることを考えると、これはやはり行かないといけない。YouTubeとかで映像も出るしウェブサイトとかも充実しているから趣旨もわかるんですけど、一番大事なのはその場の空気というか、どういう雰囲気が集まってくるのか、どういうモチベーションを持っているのか、そういうことが今まで反原発の運動をやってきた中で一番大事なことであったからです。つまり、どうして「素人の乱」のデモに1万5000人も来たかということ、掲げられている主張だとか、デモの現象よりも、どういう気持ちでその場に来たかということが大事だと思ったんです。だから、これはニューヨークにも行かないとしようがないなとなって考えて、それでいったんですよね。

さて、原発の話に戻ると、なんで警察が反原発デモを弾圧するのかまったく意味がわからないんです。でも、いろいろとわれわれのデモをショボく見せようとしてくるじゃないですか。4月に高円寺デモをやった時には大勢人が集まって、それをなんとか鎮めようとしていたし、渋谷でやった時はデモ隊を分断して印象を小さく見せようなんて姑息なことをやってきた。それだったら広場にしようと思って、アルタ前で反原発広場を作ろうとしたら、その次は広場に囲いを作ってそもそも集まれないようにしたりする。そのうえ、事前にテンション下げのために、大量逮捕しようとしてたりしてくるんですね。なんか嫌になってくるじゃないですか。警察とイタチごっこをするためにデモをやっているわけではないんです。そんなことはわれわれのやりたいこととは全然関係ない。でも嫌がらせが行われるのは、それは警察のためにもやっているようなものだと思うんです。同じように、この放射能がいつ来るかわからないところ、原発がたくさんあるところに住んでいる人同士で争っている場合じゃあないだろうと言いたい。そんなしょうがないことで争っているのも嫌だな、ということを伝えたい。警察とこっち、頭の出来はどう考えても違うんですよ。こっちの方が賢くて。向こうは初回に弱い。つまり初めてやることに弱いんですよ。だから、警察への対抗法とは間違いなく先手必勝なんです。警察の側も、きつこういう部屋で会議とかやっているんでしょうね。(笑) デモの映像でも見ながら、ちょっとストップストッ

プ、ここでダイブしていますとか、ここに阻止線を作りましょうとかね。そういうまどろっこしいことを、あの人たちは絶対やっているんですよ。だからそういうことをする前に、われわれがとりあえず意味のわからないことをパッとやっ飛ばせば勝てる。それでいちごっこをやるのも嫌だし、面倒くさいし、2回目やったら負けるというのも経験上わかってきたので。9月11日に大弾圧が来た時に、さて今後どうするかということになって、最強の対抗方として「もうやめる」という荒業をやってやろうということになりました。「原発やめろデモ」を一時的にやめちゃったんです。それも全然中心がないような感じだったけど、一応呼びかける人がいないといけなかつたかと思って「素人の乱」という名前を出して。『原発やめろデモ』を主催してきたのも、「素人の乱」の人も確かにいるけれど、それ以外の人たちがすごくたくさん来るんですよ。1回目はまだ「素人の乱」の人たちが中心となってやったのは事実なんですけど、2回目、3回目のデモ、そして6月11日のアルタ前広場を作る時とか、あるいはそれ以降は「素人の乱」の人は本当に少ししかいない。それ以外の人がいっぱいいて、それもどこの誰だかわからない、初めてデモに来ました、みたいな人が会議に来るような状態になっていたんです。むしろ警察の方が「素人の乱」主催と言う風に仕立てていって、「素人の乱」は危ない、というようにしたんです。そう来るならもう「素人の乱」はやらない、というようになって、今までの人たちが別々にそれぞれ好き勝手にやりましょうという感じになったんです。無数の小さいデモがあるというような感じにね。それで、われわれはニューヨークにいつてしまったりして、外から見るとわけがわからなくなった。

池上：デモは世界どこでもできるから、別に東京、高円寺に固執しなくてもニューヨークでもできるしヨーロッパでもできるということですよ。ご存じだとは思いますがスペインでは5月15日にマドリッドのソル広場で40万人が集まりました。その後も継続しています。ギリシアは2008年から緊縮財政などでゼネラルストライキを繰り返していますね。意外と知られていないところでは、9月くらいにイスラエルでも40万人のデモがあったんですよ。イス

ラエルの若者が一番関心があるのは、パレスチナ問題ではなく、格差問題ですから。だからデモは高円寺だけでなく、世界中どこへ行ってもできる。そういう感じですよ。

木下：そういう意味でデモが当たり前になったのと、逆に警察の目線で付け加えるともうだれが主体なのかわからないわけですよ。昔の公安警察は組織の中で活動家が持っている秘密を暴くということをやりましたが、今はほとんどTwitterで流れてしましますから。あとはやはり読めないんですよ。僕はよくデモのスタッフとして警備係をやるので、警官から愚痴を言われるんですけど、毎回どれくらいの人数が集まるかわからないし、あらゆるデモがたくさんあるから、全部にでかけなければならない。もう嫌だと言っていました。向こうも流れが読めないんですよ。ただそうすると「素人の乱」というのが目立つから、そこにだけしがみついて物事を判断しようとして、わっとうってしまった、という流れなんだと思うんです。そういう意味でデモが遍在化しているというか、どこでもあって、それがあつた程度共通の傾向を持っている。ではさらにもう少し議論を進めていきたいのですが、松本さんはよく台湾へ行かれますし、池上さんはよく韓国へよく行かれますね。韓国では有名な日本の知識人になっています。今までずっとヨーロッパの話をしてきたので、アジアのこと、彼らの日本に対する見方、あるいは向こうの原発の取り組み方について少し話をして進めていきたいんですけども。

松本：台湾はすごくいいんですよ、あたたかくて。ゆるいんですよ。原発の話でいうと向こうは第一、第二、第三原発があつて、第四原発を今建設中なんです。もうできる寸前なんですけど、この第四原発は純日本製です。これがすごく大問題になっている。今まではアメリカ製だった。こんどの第四原発はまさに東芝と日立と三菱がやっていて、今度は日本製でやろう、というようにごり押しをしていた。柏崎原発の廉価版みたいなものを輸出しているらしいんですよ。同じ形のものをどんどん簡略化したりしてね。これは危なくてしょうがないんです。それを作り始めている時に福島原発が大爆発したから、これは危ないじゃないか、日本製で作っていたら向

こうじゃ大爆発しているぞ、となった。それでさすがにみんなも関心を持ったみたいで、とは言ってもそこまで盛り上がっている運動ではないんですけども。福島事故の後で1万人くらいのデモがあった。一応向こうの事情では、しっかりした人達が運動をしていたというような背景があった。でも若い人たちとかアート系の人たちとか、そういう「大馬鹿な奴ら」もいろいろやりたくて、サウンドデモをやりたいみたいな話をしていたんですよ。それでサウンドデモをやってみようという話になった時に、ちょうど4月10日の高円寺のデモがあって、向こうの人たちは日本でもこんなことやっているのかとびっくりしたみたいです。それで日本の映像とかをいろいろ見て、大勢人が集まっているということでそうとう勇気づけられたそうです。若い人たちがサウンドデモをやろうという話になった時も、最初は台湾の旧い活動家たちは、そんなことをやっても意味ないだろうという意見が結構多かったらしいんですけど、やっぱり高円寺の映像をみたら、「いいね、これ、やった方がいいよ」。それで成功するという流れだったりとかしましたね。様子を見ても本当にいいかげんな感じでやっていて。DJカーとバンドの車があって、バンドはロックやパンクでDJはテクノとかヒップホップとか流したりして、結構日本と似ているんですよ。自然に日本と似たような現象になっていたりして、すごく面白かったです。その辺にいる人たちがカフェを作ってそこが中心になっていて、そこに昨日まで行っていたんですけど。意外とそういう流れで盛り上がっているという感じですかね。3月11日の一周年にはまた大きいデモをやると言っていました。

池上：先々週、ぼくは韓国のソウルに行ってきました。いくつかセミナーがあって反原発運動の話をしてきたんですけども、最後に質問をいろいろ受けている時に、「また日本は一国主義でやっている。日本だけ原発がとまればそれでいいのか。君たちはエゴイストだ」という批判を浴びたんです。ぜひ反原発運動を輸出してほしいと頼まれました。韓国では運動はさほど盛り上がりはないんですけど、いくつかありますね。3月10日に釜山とソウルで福島一周年の反核祭りという企画があります。もし3

月10日ごろソウルが釜山に行かれる方は、3月10日の2時から、釜山駅前とソウル市庁前で集会があるそうなので行ってみてください。韓国に原発は20機あるんですけど、その説明を見ると、1万人来れば止まる、5000人来ても止まるだろう、1000人だとちょっとだめだろう、という風に書いてありました。韓国についてはいくつかトピックがあって、一つは、日本では今みんなガイガーカウンターを自分で買っているところを計っていますよね。この間新聞に250万件のデータが蓄積されていると書いてありました。韓国でもそれに刺激されたのか、自分でガイガーカウンターを買ってきて計測している人がソウルにいるんですね。そうしたらソウルの道路4か所から非常に高い線量が去年次々と発見されたんです。なぜこのようになったかよくわからないんですけども、どうやら道路を舗装する時に放射性物質をアスファルトに塗り込めたらしい。これを撤去するかどうかで今もめているみたいですね。もう一つは、3月26日か27日に韓国で「核安全サミット」というものがあるんです。これは「日本はもうだめだから次は韓国が核技術を世界へ輸出するぞ」という国際会議です。しかし、これに対抗するサミットが行われるそうです。農民が高圧送電線の建設に反対している地域か、広島、長崎の韓国人被爆者が多く住む村、このへんで開こうと考えているらしいんですね。さらにもう一つ。韓国の地方自治体の少なからぬ首長が、脱核宣言をしようとしているんです。核を廃止しようというよりは徐々に減らしていく方向で考えたい、くらいの感じなんですけども、徐々にみんなの目がそういうところに向いている、というのが韓国の事情です。また頼まれて中国でも話をしてきたんですけど、中国は難しいんですね。日本で3月11日に核爆発があった直後、中国で塩が売り切れたことがありました。この話はご存知でしょうか。なぜかという、塩がヨウ素を解毒するという噂が中国全土に流れたからです。みんな塩を急いで買って、そのために塩が売り切れちゃった。中には買い占めた人もいました。その直後に、これは嘘だということがわかりました。大暴落して大損、という人もいるわけです。でも、これが何を示しているのかというと、変なことを信じている奴がいたと

かそういうことではなくて、中国人の民衆の多くは、やはり放射能が非常に怖いと感じているわけですね。中国は核武装もしていますし原発もたくさんあるんですけども、民衆の心は核を嫌いなんだというのを、彼らとしゃべってみて実感しました。

木下：なるほど。アジアという話は後で質疑もふくめていろいろしていきたいんですが、とりあえず9月に「原発やめろデモ」があって、それ以降「原発やめろデモ」実行委員会としてはデモをやっていない。もっとも分散する形で、さまざまな脱原発連合でデモをやってきました。この間一つの流れができてきたのが、杉並なんですよ。『素人の乱』は高円寺という枠組みだったわけですけど、もうひとつその枠をひろげて杉並地域の中で運動やデモをやろうという流れがだんだんできたんです。これも1年間いろいろな運動をやってきたなかで一つの新しい流れだと思うんです。そのことの経緯をふくめて、ちょっと話を聞かせてください。

松本：9月11日に大量逮捕されたりとか、いろいろ面倒くさいことがあって、デモをやめるというすごい作戦を決行しました。それでニューヨークへ行ったり、小さいデモに参加したりとかいろいろやっただけなんです。そうこうしている時に、杉並区の老人たちとか子持のママさんたちとか父ちゃんたちとか、店をやっている人とか、その辺の人たちの中にも原発はよくないと思っている人たちが意外といて、デモをやりたいという声があがってきたんです。それで去年の年末くらいに杉並区で何かやろうという話になった。最初は超党派でやりましょうということでした。共産党系、社民党系、いろいろな政党を超党派でやる。そういう話が出てきたけど、これは完全に失敗だったらしいんですよ。活動家みたいな人しか集まらなくてね。こんなのやってもしょうがないじゃないかということになって中止になった。ぼくはそれをすごく評価しているんですよ。大体そういう時って、やるんですよ。つまらない政治家やつまらない活動家がいっぱい集まってやって、「全区民デモ」なんておこがましくも言い始めたりして。それは全然面白くもないし意味がないじゃないですか。ところが、ちゃんと「これは意味がない」ということになってやめた。その人たちも、実は「素人

の乱」のデモを目撃していたんです。彼らは「素人の乱」が何かよくわかっていないと思いますが、とりあえずいろいろな人たちが来たということがとても大事だ言うんですね。今まで政治とかに関わってこないひと、そこでは本当に本心からやっている。

「ただ原発に反対だから来る」「体系的な主義主張は関係ない」というような人たちも来られるようなことをやらないとだめだ」ということになったんです。あとはやっぱり地域の人たちだから、その地域でやりたいということになった。それで年が明けてから、あらためてもう一度呼びかけられました。そうしたら年末に集まった党派の人たちも来たりしたんですけど、今度はそうじゃない人たちがいっぱい来たんです。でも、その地域にいる人は、たとえば自分のお店をやったりすると、まあ本当は自分もそうなんですけど、実はお店から離れられないんですよ。まして土日なんて結構稼ぎ時だから、店開けるんです。デモなんか絶対行けないんですよ。あとは老人なんて、80歳90歳の人が渋谷のデモとか行ったら死んじゃうかもしれないじゃないですか。だからとてもじゃないから行けないし、デモをやっていることを知らないんですよ。地域のことしか情報も入ってこない。ママさんたちも子供を送り迎えしたりして、そんなよそまで行く時間はなかなかない。その人たちからしたら、感覚としては2回目のデモなんです。いろいろなところで脱原発デモは盛り上がっているけど、それにはそこまで興味がなくて、高円寺で去年あったということだけみんなすごく覚えていてくれました。「もう一回やろうよ」というくらいのテンションなんです。それがすごく面白かった。それで実際にやり始めて、高円寺で前にやった人たちも呼ぼうということで声をかけられて、行ってみたら本当にいろいろな人たちが来ていました。会議もいろんな人がいて、ここはニューヨークかと思うくらいですよ。(笑) デモの会議をやるから集まってください、って呼びかけられるんですよ。『素人の乱』が始めた「原発やめろデモ」でさえ、会議は公開していなかったんですよ。制限はしていないんですけど、知り合いが知り合い呼んで、その知り合いが来てと言った感じで集まって会議をしていたんです。でもこの杉並デモの場合は、何月何日に阿佐

ヶ谷の産業商工会館という公民館的なところでdemoのための打ち合わせ会議をやりますとくる。また場所がいいじゃないですか、地元っぽくて。それに、ご老人とかが杖ついていっぱい来るんですよ。無数のまったく違う人たちが集まって会議をやる。その会議の内容もすごく面白い。しぶしぶ地域の老人が司会を引き受けるんですね。それもまたいいじゃないですか、長老がとりあえずまとめ役になるという感じで。それでいろいろな人が話すんですけど、もうみんな違うことを言うんですよ。温度差も全然違うし、やってたことも全然違う。「毎週demoをやって最後の攻撃をかけなきゃだめなんだ」みたいにテンションが高い人もいるし、「脱原発はいいすぎじゃないか」みたいなソフト路線もいたりとかする。「再稼働阻止くらいにしておいた方がいいんじゃないか」とか「放射能怖いくらいにしておいた方がいいんじゃないか」とかね。もうそこから議論するのか、というくらいのところから始めるんです。毎回みんなが手を挙げて全然違うことを言う。司会の人もおじいさんだから、次の人にあてて、全然違うこと言って、また次の方、という感じで、いつまで続くんだと不安になってきたあたりで、そのおじいさんが、「みなさん意見が全然違うようですが、どうしましょうか」って匙を投げてしまって、完全にまとまりがついていない。その日の会議も2時間くらいやって、結局demoをする日の日程くらいしか決まらなかったんです。団体名すら決まらない。それから第二回、第三回と会議をやって、徐々に司会もゴリ押しする人でもいいから若手に仕切ってもらおう、みたいなことになっている。いろいろ話が進んでくるんです。会議も、何月何日どこって呼びかけられていて、みんな集まる。だから120人とか来るんですよ。それだともう集会みたいになってしまいます。しかもそれを全部映像で撮っていて、会議が終わったらインターネットにあげちゃうんですよ。だから、会議が完全に公開されているわけです。たとえば「demoの申請に誰が行くか」という話になった時も、みんな長老たちもdemoの申請なんてしたことがないから、「ああ俺demoやったことあるからこうやればいいんですよ」っていろいろ話をするんです。でも、その内容も公開している。あげくには、松本さんは何

回かdemo申請しているから、「素人の乱」でdemo申請してくれませんか、なんて司会の老人が言ったときには、「やってもいいけど9月の時も逮捕されたし、また「素人の乱」でやるって言うと、あのわけのわからない若い奴らが集まって来て馬鹿騒ぎになるんじゃないか、という風に警察も警戒して厳しくなるから、警察にバレないように別の人がやったほうがいいんじゃないですかね」と言ったんです。言ったんですが、それも映像で公開されているから、完全に意味がないんですよ。(笑) それくらいになっているから、これは本当に「素人の乱」だなあと思った。もうぼくたちは、「素人の乱」名乗るのやめようかなあ、と思うくらいですよ。でも、それくらいいろいろな人たちが集まってやっているのが、杉並demoの経緯と会議の様子です。それで2月19日のdemoに突入する。

池上：イルコモンズ曰く「ど素人の乱」だそうですね。(笑)

松本：ははは。本当にそんな感じですね。だから全員一からやるというのがすごくよくて。しかも会議でみんな無責任にめちゃくちゃ発言するんですよ。発想も、地域の人たちがやっているということで、宣伝どうしましょうかという話になった時は、おばちゃんたちが、「宣伝が一番すごいのは新聞の折り込みチラシよ」とかいうことを力説する。おじいさんも、町内会の回覧板でまわしてみようか、みたいなことを言いだしたり。地域の人たちの発想は違うな、ということがありました。ママさんたちも子供を呼ぼうということになった時に、うちの子供呼びたいけど、絶対途中で歩きたくないって言いだすから、泣きださないようにお菓子を満載したカートを用意して、泣きだした子供にあげたり、カートに乗せたりして喜ばせたりしようみたいという意見が出たりしました。そうしたら別の人が、「うん、うちはお菓子屋だからうちのお菓子使っていいよ」とか言ってきたりとか。あれは本当に地域の人たちが公開された場でやっている有象無象みたいな感じになっているから、やっぱり9月11日あたりまでいろいろやってきて、demoをやる人と警察とのやりあいみたいになってきてつまらないからやめて、ニューヨークを見てきて、そういうのを踏まえた後にああいうのが

あったというのは、どんどん日本のデモは進化しているということです。それを感じましたね。だから2月19日のデモは、われわれも手伝ってはいるんですけど、運営に関してはほとんどやっていない。勝手に進んでいく感じで、われわれは今回参加者としてどう盛り上げるかということだけをやったんですよね。そのへんはすごい進化ぶりでしたよ。

木下：自分も3回会議に出て、この間デモが終わってからの総括の会議にも出ましたけど、みんなが言うのは、会議そのものが面白かったということです。合意形成そのものが面白かった。これはなかなかない文化ですよ。普通会議って、編集会議とかもそうだけど、つまらないじゃないですか。そのへんが違うということと、あとは総括会議の時も総括の仕方でやっぱり目線が低いですから、おばさんたちとかが話す時は、もう事前に近所に声をかけているんですよ。近所の人たちがどういう反応だったかということを持ってきているんですね。パーマ屋のおばさんは店の中で踊っていたよ、とかそういう風に見えないところでデモというものが波及効果をもたらしているんだと思います。いろんな人が話すから、いろいろ立体的に見えてくるんですよ。これは聞いていて非常に感動的でした。それをまた一つの柱にしてさらにいろいろなことをやっていこうとしているんですね。そういうのって単純に「原発やめろデモ」だけではなくて、いろいろな意味でこれまで関わりがなかった人が混じり合いながら、ある種の地域社会の中で、それ自体を変えていくような力になるかもしれないという感じは持ちましたね。

池上：地域というもののありかたも含めて、既存の団体や個人もそうですけど人間関係そのものが去年から変わってきているということをひしひしと感じられますね。

木下：だから一種のユートピア性みたいなものはあると思うんですよね。杉並デモでも強く感じたし。また3月11日には板橋デモがあるんですね。板橋は板橋でやっていくわけですよ。そういう風にそれぞれの地域の中でやっていく時に、われわれ「素人の乱」は別に何一つアイデアを出していないんですよ。本当に自分たちで考えて自分たちで発言している。このあいだの総括会議も「素人の乱」は1人

もいませんから。それでもちゃんとできるんですよ。そういう関係が作られてやっていく、というように回り始めたというのは、一年間やってきて一番いい意味での成果ではないかと思います。ということで、大分時間が進んできたので最後にこのオキュパイの流れの中で5月1日にゼネラルストライキという話が来ているんですけども、これについて樋口さん、説明してくれますか。

樋口：お手元に、「日本の人々への連帯の呼び掛け」が配られていると思います。「オキュパイ・ウォールストリート」は9月17日に始まって、結局ズコッティ・パークを占拠していたのは2ヵ月くらいで終わってしまいました。その後、公園占拠自体はなくなってしまったんですけども、Assemblyはずっと続けていたんです。テントは張れないけど一週間に一回くらいみんなであそこに集まって、これからどうしようという話をずっと続けてきた。そこでこの「オキュパイ・ウォールストリート」が次に何をやるかという話になった時に、オフィシャルに決まったことというのが、グローバル・ゼネラルストライキなんですね。ウォールストリートも杉並デモのように多様なバックグラウンドの人たちが関わっている運動だったんですけど、最初はその一部の「オートノミスト」とかアナーキストとか反資本主義者といった面々が、次はグローバルゼネストをやろうと言い始めていたんです。それが「オキュパイ・ウォールストリート」のGeneral Assemblyで「オキュパイ・ウォールストリート」全体としてこういう方針でいこうということで5月1日にグローバル・ゼネラルストライキがオフィシャルに呼びかけられるようになって。それでニューヨークにいる日本人の活動家が、日本の人々への連帯の呼びかけというものをこのような（配布物）形で。一応Facebookとかではあがっているんですけども、こういう形で話をして表に出すのは初めてです。それで、そこ（配布物）に何が書かれているかというと、日本の場合時期的に5月1日というのはとても重要になる。というのはみなさんご存じだと思うんですけど、今原発が54基ある中で2基しか動いていないんですね。4月の末には定期検査で全ての原発が一度とまるだろうと言われている。だから5月1日は、全ての原発がと

まり、再稼働しなければ原発なしでもやっていける、ということが証明される日なんです。それまでは、自分たちも反対、反対、反対という運動をやってきたんですね。でも5月1日に全ての原発がいったんとまったとなったら、やっと俺たちは勝ったんだ、**We are winning**という言葉が初めて言える。そういうタイミングにグローバルゼネストが合致するので、それに合わせて呼びませんか、ということが、この連帯の呼びかけです。これで具体的にどのようなことをするかは、まだ日本の反原発運動をしている人の間でも何も話が進んでいないので、これからどういうことをするか決めていく段階なんですけど、たとえばここにいるみなさんにも、これに役立つようなアイデアがあれば、ぜひ出してもらえるといいなと思っています。

木下：すべてこれにかっちり合わせるということではないですが、現実には再稼働という課題が迫っているという時に、どのようにやるか。今まで通りではなく、さらに地域に潜っていく、というやり方もあります。3月11日も渋谷公園で集会がありますけど、板橋でもデモがあるわけです。いろいろなデモがあっていろいろなやり方がある。そういういろいろな可能性をできるだけこぼさないようにして、さらに議論をして実際に取り組んでいきたいと思うんですが、最後に何か言いたいことはないですか。

池上：4月末に泊原発がとまるということになっているんですけど、北電は定期点検のための停止を5月にずれこまそうとしている、という報道がつい3、4日前にあったんですけど、どうなるかわかりません。大体みなさん感じてらっしゃると思いますけど、今の世界、日本も含めてですけど、ひと月くらいで状況ががらっと変わっていく状態です。たとえば、報道はまだないと思うんですけど、今日沖縄の普通の港にインドの駆逐艦が停泊しているんですね。アメリカ軍の駆逐艦が来るのはわかるんですけど、なぜインド軍の戦艦が沖縄に来ているのか。これはよくわからない。港湾労働者はストライキでこれに対抗しています。駆逐艦は明日出ていくんで、ストは今日までなんですけども、いくつかの市民団体、平和団体がゲート前で抗議運動をやっているという状況なんです。2005年から2006年に日本とイン

ドの間で、たしか安倍政権か麻生政権の時だと思うんですけど、日印原子力協定が結ばれたんです。たぶんそれが軍事協定と連動していて、もちろんそのバックにアメリカがいるとは思いますが、アメリカと日本とインドで原子力および軍事協定を結んだ。ここから先は推測ですけども、インド洋からアジア、太平洋におけるインドの防衛、アメリカの防衛、資源の確保、といった思惑はあるのではないかと思います。だからこれは新局面だと思うんですね。去年末にオバマがアジア重視の外交を打ち出して、それがこういう形で姿を見せ始めている。それが原子力協定と連動している。これからは今まで見えてこなかったことがわりと身近に、なんだこれは、と次々に現れてくる時代でしょう。だから何が起こるかわかりません。しかし、世界は今どこでもデモみたいになってきて、それに対応しようとしている。そういう状況だと思います。それで3月11日、もしくは4月末、もしくは5月1日を迎える。そういう状態です。

木下：ありがとうございました。

第二部（質疑応答）

木下：それでは質問でもご意見でもなんでもいいのでぶつけてください。できれば話すときに少し自己紹介をしていただけると嬉しいのですが、挙手をしていただいて。どなたかありますか。

A：横浜の大学で教員として働いている者です。昨年からの脱原発デモに私も参加してきましたが、その経験から、少し困っている問題があったので、いろいろな運動を立ち上げてきた方々としてどういう意見があるかかぎたいと思います。私は横浜に住んでいまして、6月11日に3000人規模の、横浜としては大きな規模のデモがあったのですが、そこで私もスタッフとして参加したんです。そのデモの後に参加者からメールで、いろいろよかったという感想とともに苦情のようなものがありました。「私は脱原発と思って参加してみたのにチェ・ゲバラがプリントされた服を着ている人がいる」だとか、「沖縄の基地反対などの関係ない主張をする人がいるので嫌になった。ああいうことはやめさせてもらいたい」というご意見ですね。そういうのを排除してやめさせてしまうのはデモとしてよくないだろうとスタッフ一同思ったんですけど、こういう人をどう説得していくのでしょうか。いろいろな人が集まってくる時にそういうことに関する合意の仕方ということについて、似たようなお悩みがあれば教えていただきたいなと思います。

木下：どうでしょうか。苦情問題ですね。

松本：脱原発デモでは、というより脱原発デモだからこそ特にということもあるとは思いますが、そういう意見もあったりします。でも大体そういう時は「うーんそうですね」みたいにうやむやな感じにして、そのままいろいろな人が来る、というパターンが多いですね。真面目に考えはじめると、きりがなくなってしまう。それを規制しはじめるとわけがわからなくなると思うんですよね。たとえば沖縄の基地問題を訴えている人からしてみたら絶対沖縄の問題と関連づけて考えていると思うんですよ。関係ないなんてとんでもない、これは同じ問題だ、と思っているし、あるいは日の丸を持ってくる右翼の人たちにしてみても日本を守るためにやっているから完

全に関係がある重要なことだと思って持ってくるわけじゃないですか。だからそういうあからさまなものを消していった時に最後に何が残るかといったら何も残らない。子供を守ろうという主張も、いや子供は関係ないだろうという話になりかねないですよ。どこまで関連づけるのかなんてこっちはいちいち考えていられないですから、全部どうぞ、と。ただ「原発万歳」みたいなのは違うんじゃないのかというのはありますけど。だから基本的にはあまり細かい話は聞き流すのが一番いい。「そうですね、うーんなるほどねえ。そういう意見もありますねえ」という感じで何も聞いていないようにして諦めてもらうしかないんじゃないでしょうか。「まあまあこんど飲みましようよ」みたいな感じでいいと思います。

木下：それに尽きますけど、よろしいでしょうか。勢いですね。聞いたら負けです。今回の杉並デモでは苦情が20件来たらしいんですけど、少ないですね。普通なら200件は届きますね。嫌なものは嫌だし、人によってはちょっと聞かただけで苦情の電話をしますからね。だから何もできなくなってしまう。だからそこはやっぱり聞き流すしかないですよ。では他に質問やご意見があったら言ってください。なんでもいいですよ。演説でもいいです。

B：横浜の大学で5年生の学生です。僕が初めて見たデモは6月11日の新宿アルタ前の演説で、それを見たときに参加してみたいなと思って。自分でグーグルで検索してみても新宿のツイッターデモに初めて参加してみたんです。それが僕の初めてのデモ体験だったんですけど、楽しかったです。普段できないようなことができたり、通行人に声をかけたり手を振ったりすると反応が返ってくるということが斬新で面白かったです。ただ、まだデモというものがよくわからなくて、いろいろデモをやってきた方々に、実際どこまでやれてどこまでやれないのかをうかがいたいんですけど。

松本：どういう意味ですかね。

B：法律にひっかからないとかそういうことです。

松本：参加者としてどこまでやる権利があるかということでしょうか。

B：逆にどこまでやったら逮捕されるのか。

松本：その限界点はどこか。それは難しいですね。

これは完全に状況しだいですよ。法律はそうとう緩くて、本当はいろいろなことが認められているんです。デモをやる権利は当然誰にでもあるじゃないですか。それでデモをやるんだけど、完全にマークされているデモになると警察がデモ隊を取り囲んで、ちょっとでも車線からはみ出すと警察がぶつかるとかなんだとかいって公務執行妨害で捕まえたり。かといって緩い時は全車線が人で埋まってしまったこともあります。これは状況しだいというところがあるんじゃないですかね。盛り上がっていたりいろいろな人が来ていたりすると緩かったり、完全に地域から孤立したデモをやっていたらいくらでも捕まえ放題だから、ちょっとのことでダメになったり。だからなかなかなんとも言えないですけど、基本的には人としておかしいことをやっていなかったら大丈夫だと思いますよ。たとえばいきなり殴りかかるとか、いきなり火をつけたりとかそんなことやったら当然捕まりますけど。大丈夫なんじゃないですかね。これ答えになってないですね。

木下：普通にやっていたら大丈夫です。

松本：でもたとえば爆竹鳴らすと、人として間違ったことはしていないけど捕まりますよね。中華街の旧正月で爆竹鳴らしても捕まらないじゃないですか。結局警察が何を考えているかよくわからないんですよ。すべてはどういう状況かによるということですね。「素人の乱」のデモだといきなりバルサン焚いたりする人もいます。よくわからないことをやっているけれど、まあ大丈夫かなということになる。いろいろですね。

木下：では他に質問や意見はありますか。自分のデモ体験的なことでも構いませんので。

C：女子大学4年の学生です。最初のデモを見て出てみようかなと思った時もあったんですけど、友達が道に人がいっぱいいて通りづらくて迷惑だったという話を聞いて。福島出身なのですぐ行きたかったんですけど、自分はすごく弱気なので、東京と福島の温度差もあるし、びっくりして行けなくなってしまったんです。デモをする権利はあるんですけど、どれくらい道を占拠していいのかとか、人の迷惑になるとかいうことを考えるとできなくなってしまっています。そこらへんはどう考えたらいいんです

か。

松本：デモというのは人に迷惑をかけるためにやっているようなものだと思うんですよ。デモをやったら当然人も集まってくるし、そうするとうるさいし、道路だって人が通れなくなる時もあるし。でもそれはしょうがないことじゃないですか。たとえばお祭りをやってもそうだしどっかのデパートの初売りやセールもそうだし。人間がたくさんいる世の中である以上、何かやる時にはお互いがお互いに迷惑をかけるのは大前提だと思うんですよ。迷惑をかけないようにするには全員が家の中にいるとか全員静かにするとか、そういうことになってきてしまう。その程度がどうかという話でしかないと思うんです。みんなが静かにしようとなると多分制限がなくなるんですよ。たとえば電車の中で携帯電話で通話するのはダメっていうけど、あれ完全に根拠が分からないじゃないですか。ペースメーカーも多分嘘でしょ。普通に話している人と同じ音量で携帯電話で話していてもうるさいということになってダメ。何となく癪にさわるみたいな感じで。結局根拠がよくわからないんですよ。街中でちょっと話しているだけでダメみたいな世の中が来るかもしれない。だから結局はデモというものは人に迷惑がかかるものだと思うんですよ。迷惑の程度が、これはまずいだろう、みたいなレベルにならないようにするということは必要だと思いますけど。デモがうるさいだとか邪魔だとか言い出したらしょうがないんじゃないかなと。

木下：ひとつの問題は、日本の社会がデモに参加している人間を子供扱いしてきたことだと思うんです。どういうことかという、日本は警察の警備が非常に厳しいですよ。厳しいということは要するに、あいつらは何をやるかよくわからないからわれわれが取り締まってやらなければいけない、世間の迷惑にならないようにしてやらなければいけない、という風にやってきたということなんです。ところが、「原発やめろデモ」で「素人の乱」はやたらターゲットになりますけど、デモによってはすぐ警備の緩いデモもある。たとえば国立のデモだとか「怒りのドラムデモ」だとか、あるいは先日の杉並デモだとか、警官がとてもしない。そうするとどうなるかというと、たとえば杉並デモではカラオケ・ブロック

というものがあつたんですよ。あれは全部パンクスがやっていたんです。パンクスはいつも警察に狙われるんで普段はやり合いになるんですけど、警察のいないところでやるとなると自分たちで自治をしなければならぬ。杉並のデモでは、いかに交通規則を守るかということをパンクスのリーダーは延々と説いて、住民たちと一緒にやるんだということを演説して警備をやっていました。だからきちんと日本社会がデモを大人のやることだと認めて、デモに参加している人たちが自治的、自律的にやっていけるんだという社会を作っていくならば、デモを子供扱いするという流れにはならないと思うんですよ。しかし現状ではそうではなくデモを子供扱いしている。国家が偉くて人民は子供だというような扱いをしている社会なら永遠にそのような迷惑は出てくると思います。

池上：渋谷とか新宿とか特に大きいところでデモをやっていると、交差点を横切るんですよ。そうすると交差点で車がすごい列を作ってデモ隊が通り過ぎるのを待っているんですよ。見るとドライバーがカリカリしている。すごく気持ちいいですよ。ぜひ一度迷惑をかける快感を味わっていただきたい。福島でも、4月10日に高円寺でデモがあつた後に郡山や福島市でデモがあつたという報道がありました。実際に行ったことはないのですがどの程度のものかはわかりませんが、ちょっと感動しましたね。

樋口：木下さんも松本さんも池上さんも言っていますが、デモをしたら人に迷惑がかかるからやめた方がいいという考え方について、迷惑をかけてもいいからデモをした方がいいとばかりも思います。デモをやって、誰かが迷惑だと言って、小さくても喧嘩になって、むしろそうなるこそデモをやった意味があつたかなというくらいの気持ちなんです。というのは、デモをするということは少しでも民主主義を自分たちの手に取り戻すということです。誰かに決めてもらうのではなく自分たちで物事や社会について考えていこうという話で、そのためにデモをやっている。交通ルールでこのように決まっているから、ということに従ってやっていけばそもそもデモそのものが出てこないはず。最初のご質問にもありましたが、たとえば反原発デモなの

に沖縄のことを言っている人がいる、とか右翼の人がやってくる、これはやめてほしいと言ってきて、主催者もこのデモはこういうデモだから他の主張はしないでくださいという決まりごとを作ってしまった、そのデモに参加している人が言いたいことを言えなくなってしまう。そこで大なり小なり口論を生み出していることがデモをするそもそもの意味だと思うんですね。だからむしろ迷惑をかけてでもデモをやったほうがいいのかと思いました。

松本：質問とはずれてくるかもしれないんですけど、迷惑と思うかどうかというのはその人それぞれの基準じゃないですか。脱原発デモでは、原発に反対だと言わなければならないということと、うるさいということを天秤にかけてどっちが大事か、という時にうるさい方が嫌だという人が文句を言う。じゃあたとえば杉並大虐殺みたいなものがあつたとして1万人くらい杉並区で殺されたとするじゃないですか。それでみなすごく怒りだして、それをうるさいとは言わないでしょう。それは言った方がいいよ、自分も殺されるかもしれないから、と。温度差って大きく変わると思うんですよ。杉並デモでは主催者が会議で決めてデモコース上に1万枚くらいビラをまいたらいいんですよ。デモの3日前くらいに地域の商店街や住民のところに行って、何月何日にデモが通りますから参加してくださいとか、参加できない人は黄色い旗を掲げてくださいとか、ご迷惑をおかけしますとか、いろいろ伝えて。そうすると苦情ってすごく減るんですよ。いきなりうるさかったら怒る人もデモがあると予想していたら、わりと大丈夫だったり。迷惑のレベルっていうのは個人によって全然違うから、それをどうやって変えていくかという点でも杉並デモはすごくよかったと思うんですよ。何が迷惑かということは一概には言えないなということは体験ありますね。

D：この大学で留学生を教えている教員です。1968年くらいからずっとデモに参加して、80年代のはじめくらいまではメーデーや反戦デーといった際には動員という形で行っていたんですけど、だんだん面白くなってきたんです。その後外国に行って面白いデモに参加するというような体験をして、日本ではもうデモの時代は終わったんじゃないかという

ふうな感覚を持っていた。そうしたら松本さんたちが高円寺でデモを始めて、ああそうじゃなかったんだという気持ちを持っている者として、デモに参加する楽しさをロートルの立場から言いたいと思います。もちろん迷惑をかけることが目的ではないですが、力能感というか自己実現、自分の考えや怒り、喜びを他人に対してアピールできるということですよ。日常生活においては我慢しているけれど、デモでは言いたいことが言える。それも1人だけではできないので、他人とつるんで普段できない空間を作っていく。松本さんが革命後にできるような空間をと云ったけど、革命後かどうかはわかりませんが、学生の時に最初にデモをしてもものすごく感動して嬉しかったのが、道路を完全に占拠して、通ってくる車に赤旗を出すと車が止まるということなんです。ざまあみろと。そういう時に感じた万能感は今でも忘れられないです。占拠運動などの中にも人間の魂の実現があって、そういう考え方を持った人間が集まって日常とは違ったこと、踊りが踊れたり車が通れないような空間を自分たちの力で団結して作っていけるという根源的な喜びがあるんじゃないか。それは人間が生きていくということの一つの意味、あるいは社会を作っていくことの一つの意味だと思います。ただ僕の通っていた大学には作家の村上春樹っていう人もいたんですけど、彼のようにデモに行くことで自分自身が失われていくという感覚を持つ人もかなりいたんだろうと思います。当時の半数くらいの方は自分自身がいわば疎外されていく、失われていくという恐れを持っていただろう。現在でもそういう人は増えているのかなとは思いますが。そういうふう考える人と、僕みたいに単純に飢えて、新しい空間ができるという力能感を感じる人との対話というものができるのかどうか。もしかしたらこれは絶対できないのではないかなというような感覚を持っているんですが、その辺をフォローしていただきたいです。

木下：どこへ行っても疎外感を感じる、つまり個が消されてしまう感覚があるという人もいるんですが、僕はそういう人は繊細で乱暴な人だと思うんです。それで一切いろいろなものを見なくなってしまう。杉並のデモでは、在宅デモというのがあったんです

よ。つまりデモに来られない人にどうやって参加してもらおうかということなんです。たとえば同じようになりポンを持ってもらったりして、そういうグループを作って在宅デモをやった。自分の個にこだわる人について、もちろんそれはその人の勝手なんですけれども、やや違和感があるのは、そういうところは追求しないということですね。デモをやろうという人間は別に自己満足でやっているわけではなくて、いろいろな形で来られないけれどもつながろうと模索をしているということまで見ていない。だから繊細で乱暴だと僕は思うんです。川上未映子が非常にいい言葉を『週刊新潮』に書いていましたが、デモに来られない人がいる、デモに来る人間にもいろいろな人がいる、と言うのは簡単なんですけど、でもデモに来る人はマスでいて、マスとしてとらえるべきだと彼女は書いていました。そうしていかないと、さっきの松本さんの迷惑の話と同じですけど何もできなくなりますからね。そこはもう言いあいをするしかないと思います。

E：この大学でラテンアメリカ文学を専攻している院生です。11年間大学にいます。言いたいことは決まっていなくても、マイクを持ちたかったんです。3.11があってからいろいろ考えまして、僕もビビりなものでビビりと解放の間を行きつ戻りつしながらデモに参加しています。すごく嬉しかった半面ビビって部屋に引きこもったり、またデモに行っても気持ちよくなってまたビビってというような繰り返しを生きています。でもデモをやってくれる方には本当に感謝しています。今感じているのは、またビビりに入ったらどうしようかと。路上に出られなくなったらどうしようか、そういう局面が来るかもしれないということがすごく怖かったりします。そこでこれを機会に仲間を増やしてしまおうと思っています。よろしくお願いします。なんかよくわからなくなってきてしまったのでマイクをお返しします。〔会場から拍手〕

F：韓国から来て、日本の近代文学を研究しています。ずっと日本に住んでいるので韓国のことはよくわからないんですけど、「素人の乱」は韓国でとても有名なんですよね。私は松本さんを知らなかったんです。「素人の乱」のことも韓国で松本さんの本が話

題になるまで知らなかったんですよ。日本では全国的に有名な人なんだろうと思って、松本さん知っている、高円寺ってどんなところ、というような質問が韓国の若い友人からメールで来るんですね。どうして興味があるのか聞くと、デモがすごく面白そうに見えるんだそうです。インターネットで検索してYouTubeなどで日本のデモを見たりしていたようですが、その頃はデモがあまり多くなかった時期なんですよ。ですからどんな形態でやっているのかということのパフォーマンスとして見ている人が多かったような気がするんです。その後松本さんが韓国に入国できなかった事件がありましたよね。松本さんの本の翻訳者がうちに泊まっていたことがあったんですけど、今までは友達や知り合いが来た時にどこに行きたいかと聞くと浅草、六本木、渋谷、原宿、新宿とか言っていたんですね。ところが最近改めて聞くと高円寺と言うんです。特に釜山の人、松本さんとスカイプでインタビューをしたりしたことがあると思うんですけど、話を聞くと、AKBじゃないですけど、高円寺に行くとか誰かが優しく対応してくれると。身近な有名人という感じなんですよ。ドキュメンタリー映画やビデオを見ても現代の日本を代表するアクティヴィストだとか、デモの文化やフェスティバルの指標とされているんですね。みなさんは意図していないかもしれないですけど独り歩きしているんです。池上さんは多分釜山は見たいと思いますよね。私はびっくりしたんですけど、韓国の他の地域のデモと流れが違うんですよ。フェスティバルなんですよ。レゲエやヒップホップがあって、歌いましょうとか踊りましょうとか、すごく違うんです。だからデモの形態も韓国でものすごく多様化していて、必ずしも集団性を帯びるものではなく1人で立って自分の主張したいことを主張したり、リレーで主張したりする。日本と韓国がいろいろな形でお互いに影響し合うようなデモ文化があると思うんですね。それですごく素朴な質問になるんですけど、とにかく最近私の周りで高円寺に行きたいという人がやたらと多いんですね。部屋だけ提供しているかたちなので私はついていけないんですが、それで行ってみてどうだったか聞くと、みな面白かった、楽しかった、感動した、と言うんで

す。だからみな松本さんに何を聞いているのか気になるんですね。本が出た時は松本さんご自身で韓国に来ていろいろインタビューを受けてらっしゃいましたが、あの本も、人が自然に集まるような場で口コミでひろがったんですね。新しい何かが作れるかもしれないと、若い人たちやアーティストが期待して来ていると思うんですけども、そこでどんな議論があったのかも気になります。いつも同じことを聞かれていらっしゃるかもしれませんが、みな何を聞いてきたのか教えてくれないんです。とにかく楽しかったとしか言わないんです。今、東京を代表する人となっていて、こういうことに興味がある人にとってはすごく面白い場所になっていると思うんですが、どんなことを聞いているのかなと素朴なレベルから興味があるんですけどいかがですか。

池上：今言われたように3月10日に釜山で反核フェスティバルがあるんですけども、ポスターは、これ「世界は変えられるという予感」企画ポスター」をもう少し可愛くソフトにした感じでしたね。

松本：いろいろな人が来ますよ。韓国から来ましたとか。もう観光ルートみたいになっていて。次は浅草行くとか次は新宿行くとか、何をしに来たんだろうみたいな人が大量に来ますよ。

F：前に哲学系の研究所にお世話になっている時に、ヨーロッパからの方たちも、どこへ行きたいかということになると高円寺へ行きたいと言っていました。口コミでいろいろな形態で噂になっている。観光スポットになっているわけですね。

松本：聞かれることはたいしてないですよ。ここかあ！みたいな感じで喜んで帰るのが多いですね。でも失礼な話ですよ、こっちは普通に店をやっているから商売しているだけですよ。冷蔵庫の掃除とかしていると、ここかあ、冷蔵庫売っている、みたいに。来たら普通の店ですよ。それをやたら感動してこれはすごいすごいと言ってきますよね。

池上：なんか買っていないかい。

松本：韓国から来て冷蔵庫なんか買わないでしょ。あんな大きい物。こっちも仕事で忙しいとちょっとしか話ができなかったりするんですけど、ちょっと余裕がある夜に来る人なんかだとちょっと飲んで行きましようなんて言って店閉めて飲みに行ったり

して。そういう感じで友達みたいになるからすごく面白いんですけどね。一番多い質問はやっぱり次はいつデモがあるのかとか。日本の人もそうなんですけど、本を読んだり映像を見たりしてそれだけの情報だと毎日デモをやっているような印象を持って来るんですよ。毎日大パニックになっていると期待して高円寺に来るから、来ても何もないじゃないかなんて文句を言われたりして。いや毎日はやっていないよというやりとりが毎回基本になっていますね。

木下：よろしいでしょうか。ではさらに続けてどうぞ。

G：池上さんのさっきの話に出た、デモの社会史に関心があるんですけども、前の質問と関連させて二つ質問をしたいと思います。一つは、イラク反戦のころは日本でもデモという言い方はなくなりましたよね。ピースウォークとかパレードとかそういう言い方をしていた、昔からデモをしていた人たちが、たとえば平連の人たちが、このごろの人たちはデモと言わなくなったと言ったりしていた。しかし今はデモという言葉を選択して普通にみなデモデモというわけですよね。だからデモという言葉の使われ方、意味というものがもう一度復権してきたと思うんですがそこをどのように考えられるのかということをおうかがいしたい。もう一つはそのこととも少し関連するのかとは思いますが、さっき池上さんがドラム、リズムが大事だということをおっしゃっていた。これはすごく面白いと思うんですがもう少し詳しくお話ししていただけないでしょうか。つまり昔デモは歌と結びついていて、歌をみなで歌って調和するというということをしていました。ドラムはリズムをとるでしょうけど、かき乱しもありますよね。そこが全体の調和がなくなっているのに関連するのかと思うんですけども、そういう今までの大きなデモのイメージが確かに変わってきている。言葉とか、人が何を共有しているのかとか、どういう感情なのかとか、そういう観点から見たときにどういう動きが起こっているのかということを少し教えていただければと思います。

木下：デモの言葉の選択についてはむしろ他の人に聞いた方がいいとは思いますが、似たような問題で先ほどの問題とすこし絡んでくるんです。一

番初めの「原発やめろデモ」の会議でもめたのが、「反原発」にするか「脱原発」にするかなんです。だから「原発やめろデモ」になったんですよ。でも途中からみなどうでもよくなるんです。われわれ判断する側も気にしなくなってくるんですよ。やっていくなかでそういう細かいところは気にならなくなってしまうんですよ。イラク反戦の時に使われたパレードという言葉は、あれは逃げの言葉ですよ。要するに大衆性がない、求心力がない、受けないからという選択をしたんですが、そんなことどうでもよくなったと思うんですよ。それは言説の問題と力学の問題というか、みなでやっていく中で細かいところ、変なこだわりで議論するよりももっと実質的にどうするかというようになっていく。これは運動の力ですよ。そういう感じが僕はしました。

松本：そうですね、パレードとか嫌でした。体制にこびている感じがしゃらくさいじゃないですか。受け入れてください、みたいにしているのがすごく嫌な感じで。文句を言っているんだからデモでしょという。デモに関する固定観念はあったと思うし自分でもデモとだけ聞くとなんだか行きたくなる感じがするんですけど、違う形のことをやるということは絶対簡単にできることだからやってしまえば一瞬でそういうことは変わるという気がしています。宣伝のチラシとかもそうなんですけど、自分の言いたいことややりたいことは全開で出していった方がいいと思うんですよ。それを隠すとうさんくさくなるじゃないですか。怪しい活動家からもらうビラって大体うさんくさい。こいつ本心で言ってないなということがにじみ出ているんですよ。だからどんなに過激なことでもソフトなことでもとりあえず自分の言いたいことはちゃんとやっているものというのは信頼できるんですよ。そういうことを隠してデモをやりたいのにパレードって書いてるんじゃないかとか、本当は車燃やしたいんじゃないかとか、いろいろ疑わしくなってくるんですよ。そういうのはよくないからやっぱりちゃんとデモの時はデモと言いたいし、怒っている時は怒った方がいい。自分のやれる方法で主張したいことがあればライブでも遊びでもなんでもいいから全開で全部のことをやる。だからあまりしゃらくさい言い方はしたくな

いという感じですかね。

池上：リズムについては適当に言っただけです。もちろんタハリール広場も行ってみたいんですけど行くことはできないし、ソル広場もギリシアも行けないものですから YouTube で大体見ることになるんです。タハリール広場を見ていちばん印象に残るのはリズムなんですね。タハリール広場のリズムと言うのかな。別に太鼓がなくてもスローガンの連呼の仕方とか。70 年前後だとたとえばジョーン・バエズがいたりとかそういう話になるんですけども、今回はサウンドカーも出ているし歌がなくもない、斉藤和義の歌だとか制服向上委員会の歌だとかなくもないんですが、みなで合唱はしていないですよ。最初はいルコモンズさんなんか中心になって太鼓をたたくドラムブロックがあって、それがだんだん独立していったって日本でもドラムだけのデモが行われているということはさっきも話が出ました。それは日本もそうだしエジプトもそうだし、ニューヨークのズコッティ・パークに行ってみてもドラムがあるんですね。99%とか原発いらないとカムバラク辞めろとか、いろいろな主張の違いはあるんですが、一つ共通の物を取り出すとなるとやっぱりリズムなんです。この点で世界中だんだん似てくるというのはずっと YouTube で見ていて気づきました。ドラムはやっていくとどんどん熱中していく。今世界を覆っているのはリズムであると。今日の話ではあまり出てこなかったですけど「オキュパイ・ウォールストリート」の関係者に話を聞くと、南米からのインスピレーションは大きいと言うわけですね。たとえばチアパスのサパティスタだとかアルゼンチンの運動だとか、南米ともう一つギリシアからのインスピレーションで“General Assembly”が作られたということはよく聞きます。南米のデモを見ていても太鼓が多いですよ。『太鼓歌に耳をかせ』（石橋純著、松籟社、2006 年）というベネズエラをフィールドワークした本がありますが、言葉は英語があり日本語がありアラビア語がありスペイン語がありいろいろあるわけですけども、リズムでつながっているんじゃないかということに、YouTube をずっとみているとある日気づくんです。そして、実際にやっている人でもデモというと太鼓の音がイメージとして頭に浮かぶん

ですね。去年一年いろいろなデモがあったと思いついてみると太鼓の音が浮かぶ。来週デモがあると聞くと太鼓の音が思い浮かぶ。そういう状況に意外と多くの人がなっているんじゃないかと思うんですね。これがどういうことなのか、どういう意味があるのかということはちょっとまだわかりませんが、これはこの一年を考える上で一つの重要なことではないかと思っています。

木下：そろそろ収束に向かいたいんですが言いたいことがある人はいませんか。大丈夫かな。じゃあこれで終わります。

（まつもと・はじめ 素人の乱）

（ひぐち・たろう 京都大学グローバル COE 次世代ユニット研究員）

（きのした・ちがや 工学院大学非常勤講師）

（いけがみ・よしひこ 編集者）